

課題研究

8月22日(土)
15:15~17:15

会場: 3階 大会議室

その5

音楽科授業における教科内容の体系

「生成の原理」に基づく音楽科授業における教科内容の体系

問題の所在

平成29年改訂学習指導要領において資質・能力（コンピテンシー）ベースの教育課程への転換を受け、本学会ではこれまで、「生成の原理」に基づく音楽科授業で育成すべき資質・能力を導出してきた。資質・能力の育成は、教科内容（コンテンツ）との関わりがあってこそ実現するものであり、教育実践と関わらせて教科内容の体系を究明することは喫緊の課題といえる。そこで、「生成の原理」に基づく教材研究および実践研究を通して、音楽科における教科内容の体系を構築することを目的として、課題研究のテーマ「『生成の原理』に基づく音楽科授業における教科内容の体系」が設定された（2022-2026年度）。本課題研究における「教科内容の体系」とは、生成の原理に基づく教科内容の4側面である形式的側面（音楽の諸要素とその組織化）、内容的側面（音楽の質、曲想・特質・雰囲気）、文化的側面（風土・生活・文化・歴史）、技能的側面（表現の技能、鑑賞の技能「批評」）の関連を指す。

1年次は、音楽科の教科内容とは授業レベルという指導内容であり、教科内容と同じ4側面で捉えられることを確認し、授業実践での教科内容の4側面の現れ方を共有した。その結果、①指導者は4側面を意識して教材研究を行う必要があること、②教師は子どもの学習過程に現れる4側面の関連を見取る必要があることを明らかにした。

2年次は、指導者側から教科内容を捉えるために教材研究に焦点を当てた。教材研究では、単元において形式的側面としての「軸となる指導内容」を一つ選ぶことを目的とした。その結果、①教材を特徴づける複数の音楽の構成要素から「軸となる指導内容」を特定して一つ選ぶことの重要性、②文化的側面と技能的側面は、形式的側面の知覚・内容的側面の感受に最も関わりの深いものを、具体的に特定する必要があることを明らかにした。

3年次は、学習者からみた教科内容における文化的側面の位置づけに焦点を当てた。その結果、文化的側面は子どもの生活経験や体験と結びつき、形式的側面の知覚・内容的側面の感受へ影響を与えながら技能的側面を通じて表現され、学習者の認識を深める役割を果たすことを明らかにした。

4年次は、学習者からみた教科内容における技能的側面の位置づけに焦点を当てた。その結果、技能的側面とは、文化的側面の影響を受けた形式的側面の知覚・内容的側面の感受に基づき、表現するための身体のコントロールや他者に味わいを伝えるための用語の使い方を子どもが意識して用いることで4側面の関連がより密接になることを明らかにした。

そこで5年次は、「教科内容の4側面の関連」としての教科内容の体系の仮説と、仮説をふまえた授業構成を通して「教科内容の体系は子どもの学びにどのように表れていたか」について議論を深め、本課題研究の結論を見出したい。

方法

「生成の原理」に基づく音楽科の教科内容の理論的枠組みを明確にした上で、教科内容を授業実践の次元での指導内容として捉え直し、4側面の関連についての実践・検証を行い、そこから教科内容の体系を導き出すという教育実践学の研究方法をとる。

5年次の趣旨

5年次の目的は、「生成の原理」に基づく音楽科の教科内容を明らかにすることである。そのために、まず前半では、これまでの経緯および用語を確認し、教科内容の体系の仮説とそれを手がかりとした小学校及び中学校の授業実践での具体的な学びの姿を通して提示する。後半では、前半の内容をふまえて「教科内容の体系は子どもの学びの姿にどのように生かされていたか」という観点からパネルディスカッションを行う。

内容

- 司会 横山 真理（東海学園大学）
- 趣旨説明
鉄口 真理子（鳴門教育大学）
 - 音楽科の教科内容の体系の仮説
鉄口 真理子（鳴門教育大学）
 - 教科内容の体系の仮説を踏まえた授業実践
小学校第5学年の実践 鑑賞《ハンガリー舞曲第5番》
藤岡 美樹（別府市立亀川小学校）
中学校第2学年の実践 箏を用いた創作《さくらさくら》の前奏づくり
待田 理恵（寝屋川市立友呂岐中学校）
 - パネルディスカッション
「教科内容の体系は子どもの学びにどのように表れていたか」
藤岡 美樹（別府市立亀川小学校）
待田 理恵（寝屋川市立友呂岐中学校）
宮里 未希（琉球大学教育学部附属中学校）
中島卓郎（信州大学）
清水匠（つくば市立松代小学校）
鉄口 真理子（鳴門教育大学）